

同志社大学

2010年度 個人研究費研究経過・成果報告書

平成 23 年年 3 月 25 日提出

所 属	職 名	氏 名
神学部	助教	勝又 悦子
研 究 題 目	タルグム（アラム語訳聖書）とミドラシュ（ユダヤ教聖書解釈）の体系的比較研究	
	<p>本研究は、従来ラビ・ユダヤ教文学の副産物として見なされ、その独自性について正当な評価がされていなかったアラム語訳聖書である「タルグム」を、ラビ・ユダヤ教のプロパーな聖書解釈である「ミドラシュ」と体系的に比較することで、タルグムの独自性、創造性を明らかにするものである。</p> <p>タルグムも、ミドラシュも膨大な文献であるので、本年度の研究はスタートに位置づけられるものである。本年では、創世記のエデンの園、アブラハム、十戒、またレビ記 13 章（皮膚病について）について、タルグムとミドラシュでの解釈の違いを比較検討した。皮膚病については、タルグムがより厳密な解釈を施していること、文法的に、誰が、誰によって、○○される、という動作主体、使役関係、が意識されていることがうかがわれた。また、皮膚病の色の記述をめぐる、タルグム独自の色彩感が働いていることも伺われた。創世記冒頭部分の動詞の使い方から、タルグムの想定する世界観が推察された。ミドラシュなどで想定される世界観との比較が必要である。</p> <p>まだ、個別の事例比較に留まっているが、このような事例を積み重ねることが体系的な比較研究につながる。今後も、この研究課題を意識して、事例研究を重ねていくことが必要である。</p> <p>タルグムの独自性については、動詞「TRGM」のラビ文献での用例分析から、タルグムとラビ・ユダヤ教プロパーの世界の距離、緊張感をまとめた論文を J S I M O R 上に発表予定。また、タルグムの動詞の用法から伺われる、紀元後 3 世紀のラビ・ユダヤ教社会のひとコマを解き明かした論文を発表予定である。</p>	